授業方法について独自に工夫していること　【教育科学系】
教育学の専門的な研究方法に関する入門的な授業なので、方法論を一方的に講義するのではなく、実際に学生に研究テーマ（のようなもの）を設定させ、その研究テーマを追究するなかで研究方法を実践的に理解でき体得できるような進め方とした。 反転授業とまではいかないが、前の週に課題を出し、一週間かけて課題に取り組ませ、当日の授業では一週間の取り組みについてグループ内でディスカッションさせ振り返らせる、という方法で進めた。
ほぼ全部の授業において，学生主体の授業を実施している。3回提出してもらうレポートは採点基準を厳密にし，フィードバックを行い，書き直しをさせている。
なるべく多様な観点から話ができ、多くの人の意見を聴ける場にしたい（特定に考え方に誘導しないように） 見やすい資料作成とその説明を心掛けている（実際そうなっているかどうかは分からない）
・最新の医療情報を収集し、常に新しい情報を取り入れた授業内容になるように工夫しました。 特に厚生労働統計協会が毎年８月末に発行している「国民衛生の動向」の統計資料等に基づき、最新の情報を学生に提示しつつ、さらに小児保健の領域に関する資料を配付して説明し、より小児保健に対する理解を深められるように配慮しました。 ・学生の気づきを互いの学びにするため、グループ討議の時間を設け、「なぜそう考えたのか」を発表する機会を頻回設定しました。
学生が，課題について，自ら調べて，それを表現し，学生同士で討論して，理解を深めるようにしている。
パワーポイントで要点を示し、教育現場での写真や動画等、映像を取り入れて授業を進めてきた。 受講生が卒業年度であることを踏まえ、幼児教育にとどまらず、教育全般に係わる質問も取り上げて答え、学生生活終了後の人生においても参考にしてほしいといった思いを込め、多様な事例をあげて授業を進めた。
すべての授業で大きな目標にしているのが、講義を受けた後で、「多様な考え方ができるようになる」ことである。今回のアンケートでは、問6の設問が本目標に近く、この比率は高かったので、目標はおおむね達成できたと考えている。また、授業の進め方についても、問8−問10や問13の比率が高かったため、方向性としては大きな問題はなかったと思われる。 具体的な授業方法については、特別なアクティビティ（グループワークや体験授業のようなもの）よりも、まずは、講義内容が学生にとって興味深いものであることが大事であると考えている。内容が興味深ければ、学生は通常の座学であっても90分間思いにふけりながら、よく考えているように見える。私の専門から言えば、実際の臨床例をお話しする、ユーモアを交えて説明する、ストーリーを話す、表やグラフのデータを提示する、断定的な結論を控え、むしろ問いを投げかけるような場面を大事にする、などである。
学生同士が対話をする時間や、グループで話し合った結果を発表する時間を設け、多様な価値観を共有できるような機会を作っている。
専攻の異なる4年生対象であるため、特に基礎的知識はもとより、保育実践映像を活用するなど「学びの連続性」を意識した幼保小連携につながるような講義内容を心掛けた。また、学生自身が体験し実感することができるような授業を3回設けることで、より学びが深められるように努めた。
・演習科目では、ロールプレイやグループワーク、グループディスカッションなどを多く取り入れ、知識と体験をもとに授業内容が理解されるようにしている。 ・講義科目では、できるだけ時事問題を取り上げながら解説を行っている。また、理論的な内容については補足資料を配布し、事例を示しながら解説を行っている。

演習科目でもあり、学生自身の体験から省察した実践事例についてグループディスカッションすることで、多様な考え方や気付きが深まるよう心掛けた。また、行事による幼稚園参観を通して、理論と実践の統合を実感すると共に、より深い学びにつながるよう努めた。
本実習は、各自が卒業論文で扱いたい研究テーマについて深く掘り下げ、学生主体で検討することを目的としている。そのため、教員は先んじて決定的な意見を言わないように留意した。ただ、意見がなかなか出ない場合もあり、その場合は発表者の討論希望点を確認・拡張したり、教員から別の視点からの討論点を指摘するように配慮した。
視覚的に示してわかりやすくしている。 体験談を踏まえ、かつ学生が自分自身に引き付けられるような資料を使用している。 五感を通じて感じたほうがつかめる当事者の苦悩、生活などは映像で示している。
できるだけ具体例を挙げ、興味を持てるように、また、できるだけ系統だった知識を提供できるよう心がけた。 また、なるべく平易な言葉でゆっくり話すようにした。板書は要点のみを簡潔に書くように心がけた。 一方通行の授業にならないように、適宜、質問等を行ったり、理解を深めるため必要に応じて計算をさせたりした。
・本科目は、5名の教員によるオムニバス形式の授業である。授業方法としては、3年次の演習科目につながるよう各回担当者がディスカッション形式で授業を進めている。 ・授業内容は、教育学を構成する諸領域（各教員の専門）に即して組まれている。
授業内容のテーマごとに担当者（学生2名一組）を決め、教員が授業の3週間前から事前指導を行う。担当者は調べ学習を中心に準備をする。 授業当日は担当者が授業を行い、内容の不足分や現場の実際例は教員が補足や説明をする。その後より現場に近い場面設定をし、実習を行う。
近隣の公立幼稚園にご協力いただき、子どもと過ごす時間を設けている。また、園長先生との質疑応答の時間もあり、授業での説明と、実際の子どもの様子をリンクさせて総合的な子ども理解に繋げられるようにしている。 体験的に、ALによる学びが大きいと感じている。保育事例等を提示し、個人で思考した後にグループディスカッションを行う。各グループで出た見解はシェアリングすることで学年全体の共通理解とする。グループにおける思考過程は、全てコピーをして配布しており、得た知識や新たな考察をなるべく逃さないようにしている。
授業以外の時間にも学生から質問や連絡を受けられるように、メールアドレスを公開した。また、資料配布において、印刷物だけでなくPDFファイルも利用した。それにより、印刷物では見にくくなってしまうような資料を見やすくすることができ、また多くの資料を配布することができた。
学生が自分の経験をふまえ、できるだけ現実的に想像できるよう、具体的な資料を作成すること。 前半は、知識を講義すること、上記の具体的、現実的な理解がうながされることを中心とし、後半は、前半で得た知識を、実践で役立てられるよう、より具体的な事例を示しながら、学生自らが考えて、解決策を模索するため、グループ討議、全体討議を中心に行った。

どのような基準で学業成績の結果を出したか。　【教育科学系】
学問（教育学）の内容と研究方法は密接に関連しているので、学問の内容に関する理論的な面での理解度と、実際の研究方法の理解度の2つを基準として成績評価を出した。
シラバスに記載の通りで，レポート評価6割，発表等4割。その結果，大半がA評価であったので，難易度はちょうどよいと考えられる。
学業成績の結果は、事前に説明した通りの基準で行っている。担当科目数が多いので、科目ごとに評価の基準を変え、同一の基準にならないようにしている。
・小児保健に関する課題レポートを課し、その内容およびレポート発表、討議への参加姿勢等を総合的に評価しました。
自らの意見を他者にわかりやすく説明できるかが，評価の主なポイントである。
授業内に課した感想レポート、課題レポートを基に評価を出している。
受講回数を最重視。教科書や提示した資料をよく理解しているかを筆記試験、小テスト、レポート等の提出物で評価した。
評価は、数回のレポートでおこなうものと、知識を問う筆記試験型のものとを、講義の内容に応じて使い分けている。それに加え、出席や授業中の発言などを加味している。レポート課題については、単にインターネットで検索した辞書的な回答をするのではなく、自分の考えを論理的にまとめているものには高得点を配した。レポートの書式が整っていないもの（表紙がない・短すぎる・引用が不適切）は大きく減点している。
授業内での小レポート及び課題レポートから、授業内容の理解度を読み取って評価した。 学生へも、授業内容をふまえて記入することと事前に伝えた。
授業への出席及び取り組み状況とレポート等の提出物を基に、総合的に評価した。
講義科目では筆記試験を課し、試験結果に出席状況を加味して成績評価を行った。評価基準は大学の基準通りである。 演習科目ではレポートを課し、最終レポートの配点を８０％程度、授業後に提出されるレポートを15％程度、出席状況を５％程度として、それぞれの得点を合計して評価を行った。
授業への準備・出席状況及び討議への参加意欲・態度とレポート等の提出物を基に、総合的に評価した。
発表内容において論理的思考、文章の整合性が取れているか、また発表態度や質疑応答が適当かについて検討した。 他者の発表における意見表出や討論における積極性についても考慮した。また、授業の遅刻については減点した。
介護について、広い視野で述べられることを評価の基準にした。 広い視野とは、社会情勢、当事者について、支援者について、家族についてなど、一つの視点だけではなく複数の視点から介護を捉えられることを指す。
期末に行った本試験及び追試験の得点により評価した。追試験は、本試験で60点未満の者に行った。また、本試験の得点はそのままの点数を、追試験受験者に対しては、（追試験の得点－60点）÷4を60点に加えた点数を、成績として報告した。

・授業はディスカッションが中心となるため、その参加態度および課題レポートで評価した。 ・課題レポートの評価は、各領域の固有性もあり統一的な基準は設定しにくい。レポートとしての形式に加え、授業で扱った諸概念を踏まえた論述になっているかを一つの基準としている。
・授業中の関心・意欲やつぶやき・発言内容等 ・授業担当者としてのテーマへの取り組み姿勢、意欲、当日の授業状況等 ・当日の授業内容から提示したテーマについてのミニレポートおよび授業に関わる課題等 以上3点を総合し成績評価を行う。
授業の理解度を試験によって、授業への参加度を出席状況によって評価し、それらを総合して成績評価を行った。
レポート、授業内テストの得点の平均点で評価した。レポートは、実習、ボランティア、身近な場所等で気になった児童生徒を、授業で習った視点で見た場合の具体的な支援をレポートする内容であったが、授業で習った知識を、どれだけ言語化できるか、具体的、実践的な理解が得られているかどうかで評価した。

アンケート結果を受けて改善したいところ　【教育科学系】
難易度について「ちょうどよい」が約6割、「難しい」が約4割というアンケート結果だった。学生に理解してもらえなければ意味がないので、分かりやすい説明を今後心がけたい。
学習目標を到達できない学生がいなくなるように，理解の確認を怠らないようにする。
全体的に授業科目数が多く、多くの科目を一人で担当している。またその中でも3年次に集中しているので、どのように科目間の整合性をとるのかをより積極的に考える。 授業の振り返りの時間をより充実させたい。
・授業の難易度は97.6%の学生は、一回当たりで扱われる授業内容の量は95.1%の学生が「ちょうどいい」と回答しており、現在の授業の進め方を継続しつつ、さらに課題の提示方法について創意工夫していきたいと考えます。
授業で，新しい考えが身についたと答えた学生が強くそう思う，ややそう思うを合計すると100%になっており，授業の方針はよかったと思われる。ただし，話し方が聞き取りやすいが42%であり，この点については今後の改善が必要である。
授業科目によっては、問3における①と②の割合が低い。授業用の課題や宿題などを課していないためいたしかたないとも言えるが、何かしらの課題を出して授業の理解度を挙げる工夫も必要かもしれない。
授業外で調べてくる課題を提示することが少なかった。予習する必要があまりなく、進んで深く調べてみようとする内容への踏み込みが不足していた。物足りなさを感じたかもしれない。また、授業の量については、ちょうどよいという学生が多かったが、自分としては多くの情報を伝えたい気持ちが強くて、つい欲張って資料を作りすぎたときもあった。そのためか、一回で示す授業内容の量が多すぎるとの評価もあった。
アンケートの結果から、「内容の興味深さ」や「講義のわかりやすさ」ついては、おおむね高評価であった。一方で、問3の「自分で調べた」、問4「学生同士で内容を深め合った」については相対的に評価が低かった。学生にとってやや受け身のものであったかもしれない。今後は、「リアクションペーパー」や「グループワーク」などを取り入れ、学生の積極的な授業へのかかわりを増やしていくことを考えたい。
学生がこの授業を受けることにより、もっと知りたい、もっと学びたいと、意欲的・自発的に学習へ向かえるような授業にしようと思う。
問2問3の「自分で調査し深く考え、新たな思考を展開する」といった内容に十分応えられるよう、授業展開を工夫したい。また、「学生同士の深め合い」「教員とのコミュニケーションのとり方」についても、さらに充実するよう時間・場・方法など改善に努めたい。
講義科目では、問2、問3、問4のような、自発的な学習についての質問で「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」という回答が散見された。演習科目では毎回課題を出していたためか、そのような回答は少なかった。これまで講義科目では特に課題を指示することはなかったが、今後は中間レポートなどを課すことを考えたい。
概ね肯定的な評価であったが、問2問3の「自分で調査し深く考え、新たな思考を展開し行動した」といった内容に十分応えられるよう、学生への提示内容をさらに工夫したい。なお、自由記述（1点のみ）については、今後の参考としたい。
教員からの配布物がなかったり、授業自体の目的より各研究テーマの方向性を明示することができず、学生によっては不全感を抱いた可能性もある。個別のディスカッションを行ってもよかったかもしれない。

大学の講義とは、教員から受けた刺激から自ら学びを深めるものと認識している。 当方のアンケート結果では自ら学ぶ時間が短かったため、今後はレポートを課すなどの刺激を課したほうがよいかもしれないと思った。
（この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた）の質問に対して『強くそう思う』が5%『ややそう思う』が62.5%であるのに対し、（学習目標が達成できた）の質問に対しては、『強くそう思う』が0%『ややそう思う』が32.5%で、多くの学生はあまり目標が達成できたとは思っていないようである。また、（授業で提示された課題を、自ら検索し考えた）の質問に対しては、『強くそう思う・ややそう思う』が25%、（授業の難易度）の質問に対して『難しい・難しすぎる』が70%であり、新しい知識は身についたが内容が難しく目標を十分達成するには至らなかった、と解釈できる。今後は、授業内容を厳選し、深い理解が得られるよう丁寧に講義するとともに、適宜課題を課し、自己学習を促すように工夫したい。
全般的に高い評価を受けている。特に、授業の難易度として「ちょうどよい」「難しい」を併せて１００％であり、水準として非常に良かったことがうかがえる。また、この授業のための週あたりの学習時間も2時間以上が8割近く、受講生が授業内容に興味を持って取り組んでいる様子がうかがえる。高い学習要求をしていくことが学生の高い水準の学習を保障していくことにつながると言えよう。
重視したい点は問1～3である。この授業で提示された内容についての深い読み取り、疑問や問いが学生に湧き出たか。その発展として一歩深める学びや新たな思考をすることができたか。実際の動きが身についたか。そのために私たちが授業で何を一番学生に伝えたいか、考えてほしいかを明確にすることである。そして私たちが現場で培ってきた子どもの自立の支援や養護教諭という職種の独自性やすばらしさを語りたい。 問12、問13は学生の授業に対する期待や意欲を示している。この結果を真摯に受け止め授業に当たりたい。
授業ではたくさんの内容を扱わなければならなかったので、学生の理解が十分でなくても授業を進めざるを得なかったところが多々あった。授業進度が速い中、内容をできるだけ理解してもらうためには、提示する内容をもっと簡略化して、なるべく直観的に理解できるようにする工夫がさらに必要だと思われる。
新しい知識が得られ、興味を持つ機会としては機能し、学修目標はおおむね達成できたようではあるが、実習等での欠席も見られ、連続性としての授業となっていたかどうかが、懸念される。連続性を持って、知識の習得を提供できるよう、工夫していきたい。